日蓮大聖人御書全集

千日尼御前御返事（せんにちあまごぜんごへんじ）

（雷門鼓御書（らいもんのつづみごしょ））

新版1744～1746

千日尼御前御返事（雷門鼓御書）

弘安元年（'78）閏10月19日　57歳　千日尼

青鳧一貫文・干し飯一斗、種々の物給び候い了わんぬ。仏に土の餅を供養せし徳勝童子は阿育大王と生まれたり。仏に漿をまいらせし老女は辟支仏と生まれたり。

法華経は十方三世の諸仏の御師なり。十方の仏と申すは、東方の善徳仏・東南方の無憂徳仏・南方の栴檀徳仏・西南方の宝施仏・西方の無量明仏・西北方の華徳仏・北方の相徳仏・東北方の三乗行仏・上方の広衆徳仏・下方の

明徳仏なり。三世の仏と申すは、過去荘厳劫の千仏、現在賢劫の千仏、未来星宿劫の千仏、乃至華厳経・法華経・涅槃経等の大小・権実・顕密の諸経に列なり給える一切の諸仏、尽十方世界の微塵数の菩薩等も、皆ことごとく法華経の妙の一字より出生し給えり。

故に、法華経の結経たる普賢経に云わく「仏の三種の身は、方等より生ず」等云々。「方等」とは月氏の語、漢土には大乗と翻ず。大乗と申すは法華経の名なり。阿含経は外道の経に対すれば大乗経、華厳・般若・大日経等は、

阿含経に対すれば大乗経、法華経に対すれば小乗経なり。法華経に勝れたる経なき故に一り大乗経なり。

例せば、南閻浮提八万四千の国々の王々は、その国々には大王と云う。転輪聖王に対すれば小王と申す。乃至、六欲・四禅の王々は大小に渡る。色界の頂の大梵天王独り大王にして、小の文字をつくることなきがごとし。

仏は子なり、法華経は父母なり。譬えば、一人の父母に千子有って、一人の父母を讃歎すれば、千子悦びをなす。一人の父母を供養すれば、千子を供養するになりぬ。また

法華経を供養する人は、十方の仏菩薩を供養する功徳と同じきなり。十方の諸仏は妙の一字より生じ給える故なり。譬えば、一の師子に百子あり。彼の百子、諸の禽獣に犯さるるに、一の師子王吼うれば百子力を得て、諸の禽獣、皆頭七分にわる。

法華経は師子王のごとし。一切の獣の頂とす。法華経の師子王を持つ女人は、一切の地獄・餓鬼・畜生等の百獣に恐るることなし。

譬えば、女人の一生の間の御罪は諸の乾れ草のごと

し。法華経の妙の一字は小火のごとし。小火を衆草につきぬれば、衆草焼け亡ぶるのみならず、大木・大石、皆焼け失せぬ。妙の一字の智火もってかくのごとし。諸罪消ゆるのみならず、衆罪かえりて功徳となる。毒薬変じて甘露となるこれなり。譬えば、黒漆に白物を入れぬれば白色となる。女人の御罪は漆のごとし、南無妙法蓮華経の文字は白物のごとし。人は臨終の時、地獄に堕つる者は黒色となる上、その身重きこと千引きの石のごとし。善人は、たとい七尺八尺の女人なれども、色黒き者なれども、臨終

に色変じて白色となる。また軽きこと鵝毛のごとし、軟らかなること兜羅綿のごとし。

佐渡国よりこの国までは山海を隔てて千里に及び候に、女人の御身として法華経を志しますによりて、年々に夫を御使いとして御訪いあり。定めて法華経・釈迦・多宝・十方の諸仏、その御心をしろしめすらん。

譬えば、天月は四万由旬なれども、大地の池には須臾に影浮かび、雷門の鼓は千万里遠けれども、打てば須臾に聞こゆ。御身は佐渡国におわせども、心はこの国に来れり。仏

に成る道もかくのごとし。我らは穢土に候えども、心は霊山に住むべし。御面を見てはなにかせん、心こそ大切に候え。

いつかいつか、釈迦仏のおわします霊山会上にまいりあい候わん。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経。恐々謹言。

弘安元年後十月十九日　　日蓮　花押

千日尼御前御返事